

札幌市円山動物園における  
雄ボルネオオランウータンの環境変化に伴う内分泌的および行動学的評価

○山本達也<sup>1,2</sup>、片山めぐみ<sup>3</sup>、吉田淳一<sup>4</sup>、斉藤雅也<sup>3</sup>、渡辺元<sup>1,2</sup>、田谷一善<sup>1,2</sup>（1 東京農工大学 農学部、2 岐阜大学 連合獣医学研究科、3 札幌市立大学 デザイン学部、4 札幌市円山動物園）

Tatsuya YAMAMOTO<sup>1,2</sup>, Megumi KATAYAMA<sup>3</sup>, Junichi YOSHIDA<sup>4</sup>, Masaya SAITO<sup>3</sup>, Gen WATANABE<sup>1,2</sup>, Kazuyoshi TAYA<sup>1,2</sup> (1 Lab. Vet. Physiol., Tokyo Univ. Agri., Tech., Fac. Vet. Sci., Grad. Sch. Gifu Univ., 3 School of Design, Sapporo City Univ., 4 Sapporo Maruyama Zoo)

近年の動物園は、飼育動物の生活の質を向上するように「動物福祉」に配慮している。しかし、動物にとって生活しやすい施設環境であるか評価されることは、ほとんどない。そこで、本研究は、札幌市円山動物園の雄ボルネオオランウータン (*Pongopygmaeus*) を供し、2 回の屋外飼育場の改築に伴う環境変化が動物にどのような影響を与えているかを評価した。実験期間は、2007 年 8 月 19 日から 2009 年 2 月 20 日の間とした。評価方法は、糞中コルチゾール濃度と行動調査で行った。改築前は、13 種類の行動しか認められなかったが、改築後、30 種類の行動が認められるようになった。また、移動範囲が広がり、採食と移動の時間割合が増加し、休息時間の割合が減少した。一方、午前の糞中コルチゾール濃度は、改修工事に関わらず、実験期間中、ほとんど変化が認められなかった。午後の糞中コルチゾール濃度は、2 回目の改修工事後 1 - 2 ヶ月の間、改修前に比べて有意な上昇が認められ、平均値の 1.8 倍であった。本研究の結果から、改修工事は、オランウータンに適度の刺激を与え、生活の質を向上させたと評価された。